生きていた洋子（ヤンズ）

満洲逃避行二〇〇日

小野栄子著

生きていた洋子（ヤンズ）

満洲逃避行三〇〇日

小野栄子著

生きていた洋子（ヤンズ）
満洲逃避行三〇〇日

1985年9月20日第一刷発行

著者　小野栄子 © Eiko Ono
企画・編集　アデカ啓文舎
発行人　荒巻　隆
発行所　大阪書籍株式会社
〒537 大阪市東成区深江北2—1—1
電話・(06)974—2461 振替・大阪9—4315
〒101 東京都千代田区神田司町2—21
電話・(03)233—0595

印刷・製本　大阪書籍株式会社　Printed in Japan
定価　1200円　ISBN4 7548-9008-6 C0095 ¥1200E

生きていた洋子（ヤンズ）

満洲逃避行三〇〇日

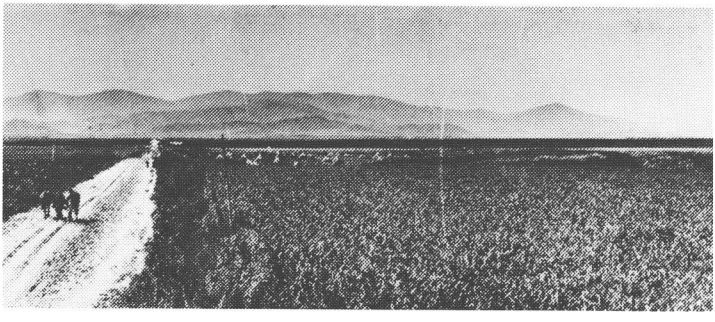
もくじ

第一編　夕陽の開拓団

● 最後のチャンス　4
1 ソ連侵攻の日　12
2 四角い太陽　23
3 避難命令　40
4 逃避行　50
5 非情の囚　67
6 祖母の決意　81

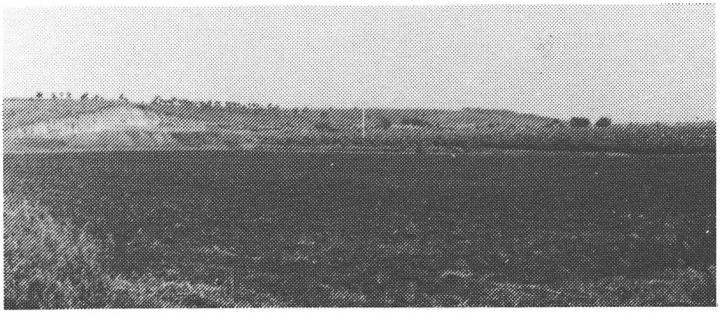
第二編　敗戦下の逃避行

7 幼子の墓場　96
8 洋子との別れ　111
9 日本の敗戦　132



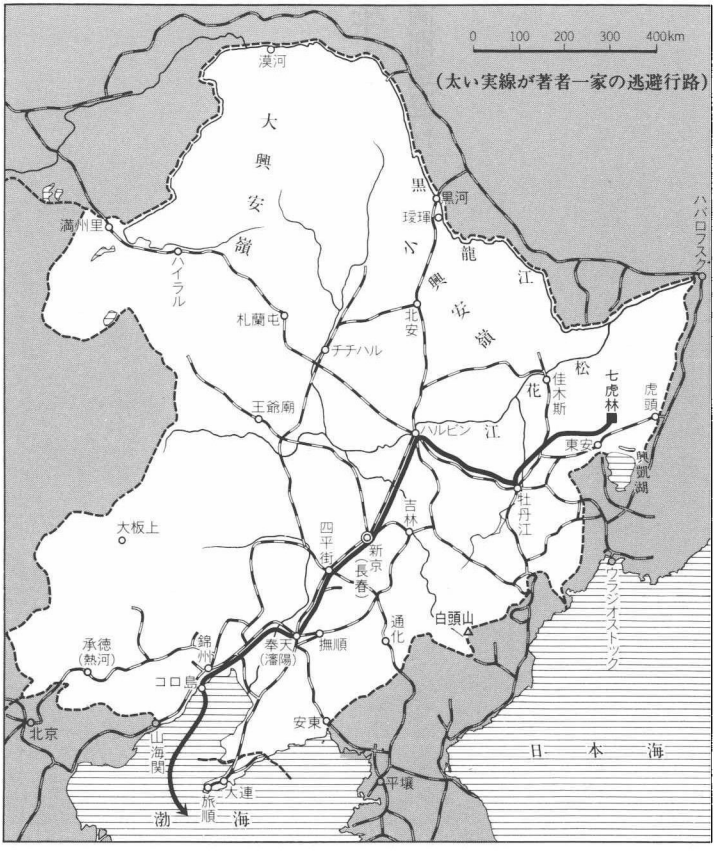
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

10 海林と拉古の収容所 150
11 流れ乞食の日々 165
第三編 母国への生還
12 奉天収容所へ 186
13 母の〝ばくだん〟 196
14 コロ島の海 215
15 母国の土 226
16 生きていた洋子 237
あとがき 251



生きていた洋子（ヤンズ）

満洲逃避行三〇〇日

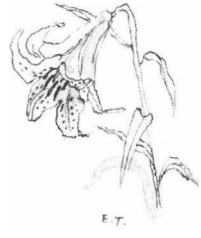

0 100 200 300 400km
（太い実線が著者一家の逃避行路）
漢河
大興安嶺
黒河
璦琿
小興安嶺
黒龍江
ハバロフスク
満州里
ハイラル
札蘭屯
北安
チチハル
佳木斯
松花江
七虎林
虎頭
王爺廟
ハルビン
東安
興凱湖
牡丹江
吉林
大板上
四平街
新京（長春）
ウラジオストック
通化
白頭山
承德（熱河）
錦州
奉天（瀋陽）
撫順
コロ島
北京
安東
山海関
日本海
旅順
大連
平壌
渤海

第一編　夕陽の開拓団

● 最後のチャンス

昭和五十六年の三月。日本政府の招きで中国から親捜しのために四十七名の残留日本人孤児が来日した。全国の新聞にもいっせいに孤児の写真が載った。早速、顔写真と経歴を何回も読んで、私の手許にある写真と見比べたが、妹らしいのが見当らない。肉親と対面して喜び合う人達の様子が毎日のようにテレビに映り、また新聞の紙面を賑わしている。涙に濡れて抱き合う人々の写真と記事を切り抜いて、私は毎日丹念にスクラップした。こうしていると、いつか必ず「妹・洋子の消息を知りたい」という私の願いも叶えられるような気がする。

そうしているうちにも、孤児の滞在期間の半分がアッという間に過ぎて、私の気持も次第にあせってきた。――やっぱり洋子は、もう生きていないのかもしれない。絶望と期待の複雑な気持が絶え間なく交錯する中で、それでもなおもう一度念のためにと、妹の写真と新聞の顔写真とを、上から順に一つずつ並べて見比べていると、上まぶたの線がそっくりの少女の顔写真が見つかっ



た。とたん、全身に衝撃が走った。

「これだッ！」

自分でも、びっくりするほどの大声をあげていた。なぜ今まで、もっと早く気がつかなかったのだろう……。私の手は、すぐ実家の電話のダイヤルを回していた。

「お母さん！　洋子らしいのがいるよッ！　新聞の一番右側上から二番目、『戦玉栄』という子の目と洋子の赤ん坊の時の写真を、よく比べて見てよ、そっくりだと思うけど……」

しかし、すっかり諦めている両親は、すぐには信じようとしなかった。

「そうかなあ……。写真の説明も全部読んでみたけど、場所も違うし書いてあることも全然違うって、お父さんが言っとるよ」

せき込んで言う私に対して、母の返事はのんびりと、まるで他人のことのようであった。短気な私は少々いらいらしてきた。

「今までは私がいろいろやってきたけど、私の仕事はここまでよ！　今度は親の出番！　確認出来るのは親しかいないんだから……。あした必ず東京に行って来なさい。お父さんと二人で、いいわね！」

興奮した私は、受話器に向かって命令口調で言った。

「わかったよ、それじゃ東京に電話してみるけえ」

母は私の見幕につられてそう答えたが、一向にエンジンのかからない様子に、私は苛立ちを覚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

えてならなかった。
そうこうしているうちに、また三日ぐらいは、たちまち過ぎてしまった。
「洋子を捜しに中国に行こうねと、あれだけ固く約束していたのに、お母さんはなぜ面会に行かないの！　あちらからわざわざ来てくれたというのに、中国まで行くことを考えれば東京までぐらいどうだと言うのッ！　たとえ人違いであったとしても、最終的には親の目で確かめるしかないのに……。我が子だと断定出来るのは、お母さんしかいないのよ！」
次から次へと頭をもたげてくる怒りを、私は電話口で再び母にぶつけるのだった。
だが、しぶしぶ腰を上げた両親に、面会について厚生省もあまり良い返事をしてくれなかったのである。その口調は、極めて冷たいもののようであった。
「ちょっと似ているぐらいでは、面会させるわけにはいきません。これまでも『戦玉栄』に二人の親が名乗り出て面会したが、二人とも違っていました。面会に来た人も気の毒だけれど、特に本人は相当のショックを受けるので、八〇パーセントの確率がない場合は、面会を許すわけにはいきません」
と、まあこんな具合で、取りつく島もない係官の返事であったという。
「ンなら仕方がないがなあ、このたびは諦みょいや」
あっさりと言う父に比べて、私のたび重なる説得に「洋子らしい」と信じ始めた母は、泣きながら私に訴えた。

「お父さんは諦めるって言んさるんだが……」
「ええッ、あきらめる？　あきらめるってどういうこと？」
私は母の言っていることが、のみこめなかった。
「東京には行かんだって、面会せずにとりあえずあとで文通だけしたらどうだって厚生省から言われたもんで……」
涙声で言うので、語尾がはっきりしなかった。
「そんなばかな！　過去の記憶のない人と文通して親子の確認ができるとでも言うのッ！　親が直接逢って確かめるしか方法はないのよッ！　そうでしょお母さん！　それともお父さんと同じで、文通するだけで納得できるの？　後悔しないの？」
母は更にすすり上げながら、
「それが出来んけえ、泣いとるだが……」
私は腹が立つと同時に、歳月が変えた父の冷淡さに唖然とした。男親と自分の腹を痛めた女親の違いを、ここにはっきりと見たような気がした。
否！　父だとて我が子がかわいくないはずはない。洋子を忘れるわけがない。
私は、なんとしても両親を東京に行かせたかった。『戦玉栄』なる人に会わせたいと思った。たとえ人違いであっても、それはそれでいい。はっきり言って、私にも自信はなかった。
「上まぶたのカーブがそっくり」というだけで、妹と断定できる根拠はなにもない。

しかし、新聞の顔写真と手持ちの写真の顔とを見比べて、上まぶたの線にハッと気がついた時、グサッ！　と胸をつらぬいたあの衝撃は私には、ただごととはとても思えなかった。そして今このチャンスを逃したら、もう妹を捜す手がかりはないと思った。

日本に引き揚げて間もない頃、満洲事変の時に軍隊が作戦に使ったという最も精巧な地図（小さな山道に至るまで入っている）で父が調べたが、それでも妹をあずけた場所が特定できなかった。

昭和三十二年七月、祖母と妹の戦時死亡宣告がなされ、二人の「死」は動かし難いものとして、両親は悲しい想いで納得した。毎朝夕の先祖供養に精を出す両親の姿は、昔も今も変わらない。

妹は本当に死んだのであろうか？　元気でいるのであろうか？　元気で幸せに暮らしているのであれば、これほど嬉しいことはないのだが、なんとか妹の生死だけでもわからないものか……。母子家庭の淋しさを味わったわりには、ひねくれもせず明るく成長した三人の我が子を眺めながら、私は今頃になって無性に妹・洋子のことが思われて仕方がない。

昭和五十四年九月から十月にかけて、読売新聞の『日本に生まれてよかったか』シリーズの中国編を読んだ。そこには、奉天残留の日本婦人の言葉で、次のようなことが書いてあった。

現在中国には親に捨てられた日本人孤児がたくさんいる。

子供を捨てて日本に帰った親達は、どうしているのか？

山の中に捨てた子供のことを忘れてしまったのか？

孤児達は自分が日本人だとわかっていても、自分の口からそうだとは言わない。なぜなら、日本人だという何の証明もないし名前もわからない。

親の方から名乗り出て捜してやらねば、自分は一体誰の子なのかも全くわからない。

私は頭をガーンと強く殴られたような気がした。そうだ！　妹もあの時は一歳九カ月だった。二歳にも満たない幼い子が何を覚えていよう！　こちらから捜し出してやらなければ……。

中国へ行こう！　親の元気なうちに！　その頃パート勤めをしていた私は、その僅かなパート料を主人の提案で、そっくり貯金することにした。中国から里帰りした人が鳥取県内にいると聞いて、飛んで行って現在の中国の様子を聞いたり、妹を捜してもらうよう頼んだりした。それと平行して、中国の公安局にも妹の写真を添えて調査依頼の手紙を度々送った。

昭和五十五年春、「中国の佳木斯（チャムス）在住の日本婦人が、佳木斯にいる日本人孤児の親探しを目的に里帰りして心当たりの親に面会したが、みんな違っていた。残留孤児を持つ親は名乗り出てほしい」という読売新聞の記事を読んで、早速妹と別れたと思われる場所や、その時の状況などを詳しく書き写真も添えて、その婦人を通して中国に送ってもらい、なんとか妹の手がかりをと祈った。

今日は中国の公安局から返事が来るか、明日は佳木斯の婦人の知り合いからなんとか便りがあ

るだろうか……と、一日千秋の思いで知らせを待ったが、その年も暮れ五十六年の新春を迎えても、どこからも何の情報も得られなかった。この頃私は、いらいらしながら毎日を過ごしていた。仕事をしていても妹のことが頭から離れず、勤務時間が終ると飛んで帰って郵便受けをのぞくのが習慣になっていた。

今はもう、日本にいてできることは全部やったような気がした。やっぱり中国まで行って自分で捜さなければ駄目だ、という気持に変わってきた。

それにしても両親は妹のことをどう思っているのか、本気で捜す気があるのか、一度確かめてみるつもりで、ある日、実家に電話をした。

「お父さん、実は洋子のことなんだけど」

「ええ？　洋子？　ああ洋子なあ、死んだ子のことか……」

「お父さん！　お父さんは本当に洋子は死んだと思ってるの？　死んだ現場を見たわけではないでしょ！　私は信じていないからねッ！　確かな証拠がない限り私は洋子が死んだとはどうしても信じないからね。お金がたまったら満洲に洋子を捜しに行くつもりだから……」

「栄子、お前どぎゃあしたか、いきなり洋子を捜しに満洲まで行くとかなんとか……」

この頃、寝てもさめても洋子のことが頭から離れない私はつい口調も荒くなり、電話口に出た父は私の見幕に少したじろいだ。また父は「洋子」という名前すら、とっさには思い出せなかったようだ。父の頭の中では妹はすでに過去の人間であり、あれから三十六年も経った現在、日常

生活の中では思い出すこともなかったらしい。

父と電話を代わった母は、そばで父と私のやりとりを聞いていたらしく、

「洋子のことはあきらめてはおるけど、もしや？　という気持もあるし、捜しに行けるもんなら栄子、満洲に連れて行ってくれーや」

近いうちに必ず満洲に連れて行くから、それまで健康に注意して元気でいてくれるように、と母に言って電話を切った。そして今まで遙か彼方にあった満洲が、なんだかぐんと身近に感じられ、一日も早く妹を捜しに行こう、と改めて自分に言い聞かせたものだった。

それが、たった一枚の新聞の顔写真の発見を契機に、四十年近くの間、忘れようとして忘れえなかったわが妹・洋子と再会することができたのである。

思えば、みんなついきのうの出来事のようである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.